



2月

上村豊

今月は二つの「卒展」に卒業・修了展(2月13~17日、県立博物館・美術館)と、沖縄県立芸術大学第30回 絵画専攻では、個々の表



山下奏子<消えゆくまなざし> (部分)



内間汐梨<そこはかとなく> (写真提供・琉球大学)

琉球大学卒業・修了展 研究者交流施設・50周年記念(2月13~17日、琉球大学 念館)

現内容(イメージ)よりも、絵画という表現媒体とそれを観る(受容する)行為が成り立つ場や制度について、問い掛けるアプローチに興味を引かれた。「光」を巡る福田周平や

県立芸大卒業・修了展

自己治癒行為を示す 山下奏子

際立つ高い完成度 翁長瞳

街中に展示場開拓 伊藤誠也

一方で、これらある種知的な表現とは対照的に、山下奏子の表現は、外在的な動機を全て取り除いた場所に立ち返ったストリート感と無防備さで強い存在感を示していた。

呉屋聡美らの表現、あるいはイメージとそれを規定する支持体やフレームの間にある不安定な隙間の上に、危ういバランスで足場を掛けていくような湯浅要の表現などである。

「故郷熊本被災後」平らで、整えられた四角のキャンパスに絵を描くことに違和感を覚え、人から紙を集めそれらを破いて構成し、その上に絵を描いたという作品は、切実な自己

琉球大学の卒業展では、会場設営作業も学生が自ら行う。表現を他者と双方向的に共有するための「場づくり」としての展覧企画の経験は、美術教師養成の重要な課程に位置づけられている。

植物に内在する色の力、い空気の中にも緊張感を感じることが布地を染めていく過程で実感した。

琉大卒業・修了展

染に集中した作品 内間汐梨

白昼夢の空間表現 亀島英莉

程の中に小さな発見を積み重ね、それが表現としての構造の核となるよう、繰り返して地道な試行錯誤を加えてきた。結果、繊細で柔らかい



翁長瞳 展示風景



伊藤誠也 展示風景 (旧・若松薬品)



亀島英莉 展示風景 (PIN-UP)

「白昼夢」の世界をじっくりと探る。今、この「白昼夢」の世界をじっくりと探る。今、この「白昼夢」の世界をじっくりと探る。今、この「白昼夢」の世界をじっくりと探る。

(琉球大学准教授)